

# 町民が一丸となった「写真の町」

## 東川町写真甲子園（東川町）

2010年7月27日、東川町の農村環境改善センターで「第17回全国高等学校写真選手権大会」の開会式が開催された。4日間にわたる通称「写真甲子園」のスタートである。

東川町長であり同大会実行委員会の会長でもある松岡市郎さんは、「被写体との出会いに『ありがとう』という気持ちで取り組んで欲しい」と挨拶。また、同審査委員長で写真家の立木義浩氏は「いままでの自分とは違う新しい自分と出会える。それを発見できれば人生の糧をもう一つ得ることができるでしょう」と激励していた。

選手代表として壇上に立った木村裕太君（大坂府立成城高等学校2年）は、「熱く熱く写真に打ち込んでいきたい」と選手宣誓をした。

今年は、参加応募校が過去最高の記録を更新。総数377校が応募、審査の結果、全国8ブロックから代表18校が選ばれ、その高校生たちが本戦会場である東川町に集まった。会場にはテレビや新聞などの報道関係者も多数集まり、強い照明やフラッシュで終始舞台が照らされていた。

印象的だったのは、その照明の中を、選手たちが地元の子供たちと手をつないで入場してきたこと。今年、初めての企画「エスコートキッズ」である。サッカーワールドカップの選手入場のように、東川町児童センターの子供たちが高校生カメラマンをエスコート、仲良く歩みを共にしていた。

会場の一番後ろでは、子供たちの保護者と思える若いお母さん方が何人も立っていた。筆者はその中の一人に「お子さんがいるのですか」と尋ねると、彼女は「ええ、あそこに」と半ば心配そうに、半ば誇らしげに指さした。



写真甲子園の開会式、選手宣誓をする木村君

## ■ 自治体で初めて「写真の町」を宣言

東川町は 1985 年に自治体で初めて「写真の町条例」を制定。その年の 6 月に「写真の町」を宣言した。「写真の町」とは、町の活動の中心に写真文化を選び、同時に被写体としてふさわしい町となるべく「自然と文化に調和した町」を目指すというもの。いわば、写真文化によって、町づくりや生活づくり、人づくりをしようという宣言である。

松岡町長によれば、第一に、グローバルな現代の社会を考えて、国際的な交流ができる町にしようとしたこと。第二に、どこを写真に写されても恥ずかしくないような環境を整えていこうと、町づくりを進めてきたということ。第三には、大雪山国立公園の素晴らしさと大衆性のある写真を結び付けて町の活性化を考えたことという。

こうした宣言に基づいて、写真文化への貢献と東川町民の文化意識の醸成を目的とした「東川賞」を制定。今年（2010 年）で 26 回目を迎え、「多くの写真賞の中でも、その独自性と先見性は際立っている」（写真家・佐藤時啓氏）と評価されている。さらに、国際写真フェスティバル「東川町フォト・フェスタ」を開催、写真展やフォーラム、撮影会などを行うと同時に、その目玉として写真甲子園を実施している。

この写真甲子園は 1994 年からスタート、今年で 17 回目を迎えた。年々参加校は増加

しており、名実共に写真家を目指す若者の登竜門になりつつある。

選手達は 3 人 1 組で、「選手村」（キトウシ森林公園家族旅行村）やホームステイ先に宿泊しながら、東川町、上富良野町、東神楽町、旭川市の指定された場所で撮影を行う。撮影時間、カメラ機材、パソコンなど全て同じ条件になっている。作品の審査は 3 回、公開で行われる。それぞれ与えられたテーマに沿った作品を発表し、その合計点数により各賞が決定される。

後援には文部科学省や教育委員会、高等学校連合会などのほかマスコミ各社がついており、特別協賛にはキャノン株式会社、協力としてフィルム会社やカメラ雑誌などが、その名前を連ねている。



「エスコートキッズ」の子供たちと触れ合う選手たち

## ■ 大会と町民の間に距離感

実行委員会のメンバーは、町長を会長として、同町観光協会会長、同町農業協同組合長、同町商工会長の3人が副会長となっており、企画委員会は31人いる。

同企画委員を務める小岩昭市さんは、北海道新聞社旭川支社のインタビューで次のように答えている。(2010年7月25日)

「私たちの仕事は、全国から参加する高校生と町民との接点をどう持っていかをやっていきます。」当初は、大会と町民の間に何か距離があったという。その距離感を縮めるため、高校生にそのマチの特産品を持ってきてもらい、大会初日の歓迎夕食会で自分のマチを紹介してもらったと語っている。

さらに、東川町民が選ぶ「特別賞」を設けた。写真の技術的なものは審査員が見るが、高校生らしいとか、一生懸命にやっているとかなどの観点から選ぶ賞として始めたという。

町民たちは、町を汚くしていると「汚い写真」を撮られてしまうため、常に町を清潔にするよう心がけているという。ある男性は、「家の前に薪を積み上げておいたり、洗濯物を干したりしていると、そんな風景を高校生カメラマンに撮られてしまうので、いい意味で緊張感を持つようになりましたね」と語っていた。

その他、2008年からは高校生を町民の家にホームステイさせるようにした。受け

入れ先の一人、西澤学さんは4年前に埼玉県から東川町に移住してきたが、彼の母校が関東ブロックで選ばれたさいたま市立大宮北高校。「自分の母校が本選大会に初出場と聞いて、埼玉県出身の東川住民として高校生カメラマンと直接交流したいと思い、応募しました」と、同町広報紙『写真甲子園』(2010年7月25日号)に紹介されている。

今年からは、サッカーワールドカップの選手入場を模倣した前述の「エスコートキッズ」も登場している。約8000人の町民が一丸となって「写真の町」を盛り上げているといえる。

こうした町づくりが認められて、2010年3月、文化芸術の持つ創造性を活かして地域活性化に取り組み、顕著な成果を挙げているとして「文化長官表彰」(文化芸術創造都市部門)に東川町が選ばれている。

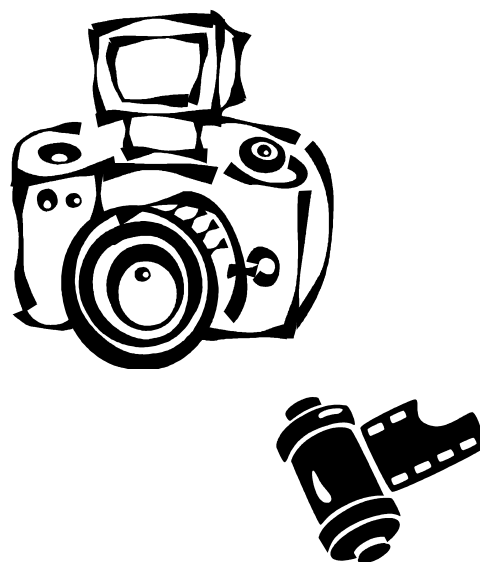


千葉県立柏南高校の選手3人。「写真でもストライク」、「写真のホームランを打ってこい!」と、寄せ書きがされたTシャツを着ている

写真甲子園開会式の後で、選手の高校生に話を聞いた。

栃木県立栃木工業高等学校は、4年連続4回目の出場の写真甲子園の常連校。そのキャプテンの柳澤悠人さん（3年生）は3回連続出場を果たしているベテラン。「今年も東川町に来られてほっとしました。先輩に負けないいい写真を撮りたい」と感想を語ってくれた。

千葉県立柏南高等学校の遠藤はるかさん（2年生）は、「この場所にいるだけで、もう感動で泣きそうです。ここでしか撮れない東川町をぜひ写したいです！」と張り切っていた。



■ 連絡先

〒071-1492 上川郡東川町東町1丁目16番地1号

東川町役場 写真の町課 写真甲子園事務局

TEL：0166-82-2111／ FAX：0166-82-4704

URL：<http://town.higashikawa.hokkaido.jp/>